

情報サービスの評価の方法及び情報サービスの評価の実際

1 はじめに

☆自己紹介

☆研修のアウトライン

2 目 標

図書館の日常業務に即した情報サービス評価の方法や評価の視点を考えて実践してみる。

◎情報サービスの評価の方法

事前課題の各自のサービスレファレンスツールの評価結果に基づき、評価の観点を考える。

◎情報サービスの評価の実際

事例課題で行ったレファレンス協同データベース事例を素材として、実際に検討を試みる。

参考:レファレンス協同データベースシステムを活用したレファレンスサービス演習(報告)

(http://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/study_report_20051020.pdf)

3 タイムテーブル 2019年7月17日(水)

午前の部 9時00分～11時30分

9:00～9:30 講義 事前課題1について

9:30～10:00 事前課題1(レファレンスツールの評価)のプレゼンテーションと質疑

10:00～10:10 休憩

10:10～10:40 グループ討議

10:40～11:10 発表と質疑(全体)

11:10～11:30 まとめ

午後の部 12時30分～15時

12:30～13:00 講義 事前課題2について

13:00～13:30 事前課題2(レファレンス事例の評価)のプレゼンテーションと質疑

13:30～13:40 休憩

13:40～14:10 グループ討議

14:10～14:40 発表と質疑(全体)

14:40～15:00 まとめ

4 情報サービスの現状と変化

○情報サービスの定義=利用者の情報アクセスを多様な方法で支援するサービス

田村俊作編著『新訂 情報サービス論』(東京書籍刊 2010年3月) p.18

① 利用者の求めに応じてその都度提供する個別支援→従来のレファレンスサービス

② 利用者のニーズを予測して用意する、利用者の探索ガイドとしての発信型支援

→レファレンスコレクションの構築、図書館が所蔵していない電子形態の情報源の評価や組織化、
パスファインダー、データベース・リンク集等のツールの作成、整備、提供等のサービス

③ 図書館が提供するサービスや情報源の使い方の支援→情報リテラシー教育への拡張

○日本の図書館におけるレファレンスサービスの課題と展望 (図書館調査研究レポート No.14)

レファレンスサービスの実態把握とこのサービスに関する認識 (2013年3月)

報告書 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8173850>) データをPDFで公開

○レファレンスツールの評価

吉田昭子 「レファレンスツールの評価」現場図書館員のアンケート結果比較

参考:文化学園大学研究紀要 人文・社会科学研究 no.22 (2014年1月)

(<http://hdl.handle.net/10457/2176>)

○レファレンス事例の評価

吉田昭子 「レファレンス事例の活用と評価」レファ協の公開事例の活用と評価

参考:文化学園大学研究紀要 人文・社会科学研究 no.23 (2015年1月)

(<http://hdl.handle.net/10457/2272>)

○図書館員が選んだレファレンスツール 2015 (第17回図書館総合展日外アソシエーツ主催フォーラム
大串夏身先生企画) (http://www.nichigai.co.jp/cgi-bin/ref2015_result.cgi#2) ランキングコメント付

○レファレンス協同データベース事例:図書館員が選んだ、おすすめレファレンスブックをしりたい

(http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000102174)

○レファレンス協同データベースの登録事例から垣間見る日本のレファレンスサービス / 佐藤 翔, 吉田光男 カレントアウェアネス (332), 8-12, 2017-06-20

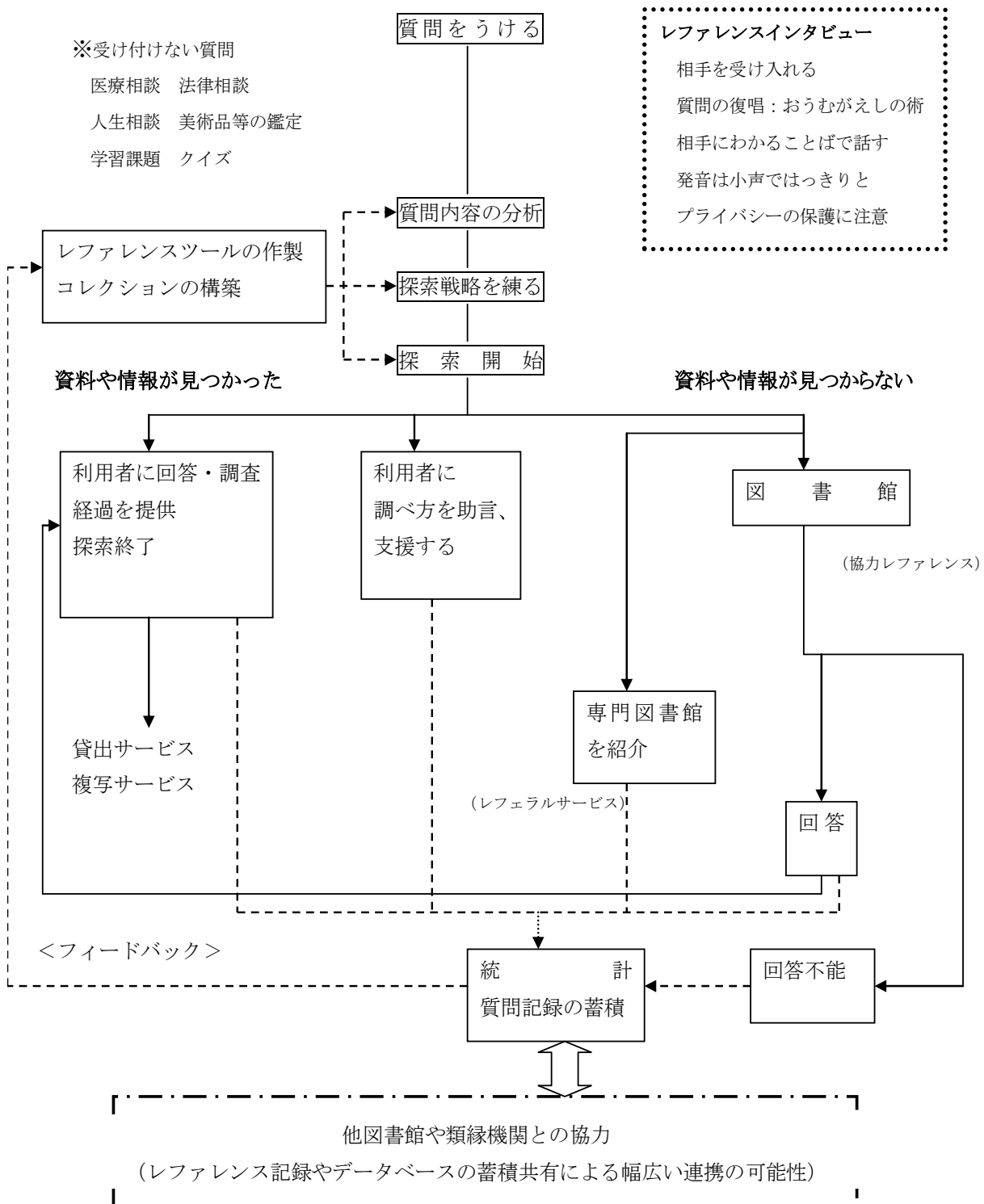
(<http://current.ndl.go.jp/print/book/export/html/34228>)

○公共図書館におけるレファレンスサービスの動向と課題

参考：齋藤泰則著 『論考 図書館とレファレンスサービス』（樹村房 2017年12月）

I レファレンスサービス実践プロセス →田村俊作編著『新訂 情報サービス論』p.53

<レファレンス実践フローチャート>



II 探索のステップ

- ・ 図書館員が使用できるツールを使って、どうすれば効率的な探索を展開できるか。
→探索範囲の設定 質問者はいつごろまでにどの程度の情報を必要としているのか？
- ・ 検索システムや図書館の蔵書、利用可能なツールの特徴や性能を配慮して、キーワードや分類記号などの検索語を決定する。
- ・ 質問者と図書館員のイメージをすりあわせて、共通理解を深める。
→質問者の満足を得るには、インタビューの初期段階で利用者の情報ニーズを的確につかむ。

質問内容を分析する	<ul style="list-style-type: none">・ どんなテーマ、キーワード、分類が考えられるか？ →探索の原点は質問者、鍵は質問の中にある（先入観は禁物） 質問者は既にどの程度調べて知っているのか？ 質問者はどの程度の情報を求めているのか？（レベル、緊急度 etc.） →図書館 OPAC や国立国会図書館サーチ等を活用⇒①② 同様の質問がよせられていないか（レファレンス事例 DB 等の活用）
探索戦略を練る	
探索を開始する	<ul style="list-style-type: none">・ 分類を手がかりに本棚を見る（関連分野をイメージしながら）・ 概略を知る（百科事典、インターネット情報源等を複数引き比べる）・ 質問内容、情報の鮮度等により、幅広い情報源を活用して探索する（図書、新聞、雑誌、年鑑、辞典類、オンラインデータベース等）・ 常に探索段階と方向性を確認しながら探索を進める →時間的制約や質問者のニーズに照らして妥当か？
回答を提供する	<ul style="list-style-type: none">・ 質問者の要求や利用目的にあわせた探索結果の提供（提示） （情報そのものの提供、情報源の提示、情報や情報源の所在提示、図書館の利用案内、情報や情報源の利用案内等） →回答は質問者に伝わるよう、簡潔で平易な内容か？ 回答制限事項や禁止事項等を配慮しているか？
回答の事後処理	<ul style="list-style-type: none">・ 質問受付記録の作成（質問者、質問種別、調査プロセス、回答、調査した資料の記録）→参考資料：東京都立図書館の記録票の例・ 統計（受付件数、内容等について各図書館の必要性に応じて統計数値を決め、マニュアル等で担当者間のカウントのばらつきを防ぐ）

III 質問回答事例の記録

図書館の現場で受けた質問の記録をとって、レファレンスサービスの改善のための検討素材とする。

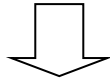
- (1) 記録用紙（書式例、→レファレンス協同データベース事業レファレンス事例データ・フォーマット（データ作成者用）、レファレンス書式事例）
- (2) 事例データベースへの入力（直接入力、紙媒体からの加工入力）

IV 質問回答記録の活用 事例検討会のねらいと前提

(1) レファレンス質問・回答事例を検討することのねらいと意義

事例によるレファレンス
質問・回答サービスの実態
把握

分析
評価



レファレンスサービスの
改善・サービス向上に役立
てる

- 質問の傾向は？
繰り返し行われる質問とは何か？（分野や内容）
- どのようにさがして回答したのか？
探索回答プロセスはどのように行われたか？
よく使う資料はどのような資料か？
資料特性を生かした探索回答をしているのか？

- 探索方法の適否、工夫
- 回答できなかった質問とその要因
- レファレンスコレクションの検討（質、量、鮮度）
- レファレンスサービスの評価
- レファレンスサービスマニュアルの作成、改訂
- パスファインダーの作成、更新

(2) 事例検討会のための望ましい前提

- ①レファレンス質問回答記録の作成
- ②レファレンス記録の整理やスタッフ間での回覧
- ③質問回答方法の明確化
- ④レファレンスツールについて学び知るための環境、ツールの整備

V 現場における事例検討会の実施

(1) 事前検討要素

◎各組織の実情に即した方法

(2) 検討会の設定